

# 半導体漫遊記

湯之上隆

173

11月23日に放送されたNHKドキュメンタリー『ブレイブ 勇敢なる者』を見た。この番組では、NANDを發明した舛岡富士雄氏と、その開発初期の頃のメンバーが実名で登場する。そして、發明から事業化へ至るまでの過程を、インタビューなどを交えて、生々しく再現している。

IOTの普及によりデータ量が急拡大し、そのビッグデータを記憶するためにNAND市場が爆発的に増大している。それ故、NANDを作っている東芝

筆者は、この番組を

## なぜ發明し事業化できたか

### 東芝のNAND、“自由な技術文化”

は16年間の日立の技術者時代に55件出願したが、これでも多い方の部類に入る。22年で500件とは、とんでもない数であり、舛岡氏はタレントだったと言える。その上、「地球

は俺のために回っている」という自信家であり、「誰の言うことも聞かない」自己主張の強い人物だった。そのような強烈な個性が、「常識では考えられない」発想を可能にした

あるはずないだろう」と思ったようだ。しかし、舛岡氏が買いたった。その経験から、86年に「わざと性能を落として安くするメモリ」としてNANDを發明した。これは、クリステンセン著『イノ

は方針を示し、後は部下に自由にさせた。彼らが自由に開発できたことにより、わずか3年でNANDの試作に成功し、事業化に移行できたと思われる。

舛岡氏等がNANDを試作し事業化した。武石氏の後ろ盾としていた90年頃

がなかったからこそ、NANDは事業化できたと言える。

見て、なぜ舛岡氏がNANDを發明できたのか、なぜ東芝がそれを事業化できたかを考えてみた。その分析結果は以下の通りである。

①舛岡氏は、1971年〜93年の東芝在職中に約500件の特許を出願している。筆者

「常識では考えられない」と思われる。

②舛岡氏は一時期、営業部門にいて、「ど



図1 “評価されない英雄”、NANDの發明者の舛岡富士雄氏  
出所：フォース ジャパン2015年7月号より

東芝は、NAND事業を売却することになったが、「自由な技術文化」を失ってはならない。この「自由な技術文化」こそが、第2のNANDを生み出す源泉であるからだ。(微細加工研究所・所長)